

外国語授業実践フォーラム 第20回会合

インクルーシブな社会の実現のために言語教育は何ができるか (2021.3.14)

学校教育におけることばと社会の インクルーシブにむけて

外国につながる子どもたちとその教育の展望から

南浦 涼介 (東京学芸大学)

研究室 <http://minamiura-lab.com/>

Twitter <https://twitter.com/minamiurya>

目次

論点の提示 インクルーシブ教育における論点と外国につながる子どもたちの教育

- 1 インクルーシブ教育と外国につながる子どもたちの教育の関係性
- 2 インクルーシブ教育にはどのような論点があるか？

分析と検討 学校教師がもつ外国につながる子どもたちに対する目とその特質

- 3 学校教師は外国につながる子どもたちの存在を教室の中でどう捉えているか？
- 4 3にはインクルーシブ教育の観点からどのような特質があるか？

実践と展望 インクルーシブ教育における「個別化」「方法化」を越えていくために

- 5 実践事例の検討
- 6 実践事例から見られるインクルーシブを生み出す教育の視点

視点

インクルーシブ教育をめぐるいくつかの論点と 外国につながる子どもたちの教育

特別支援教育とインクルーシブ教育

- 2006 障害者の権利に関する条約
- 2007 特別支援教育の開始

授業のユニバーサル
デザインへの着目
(例 桂 2011)

- 2012 共生社会の形成に向けたイ
ンクルーシブ教育システム
構築のための特別支援教育
の推進(文部科学省)

インクルーシブ教育
と特別支援教育が
一体的に語られる

外国につながる子どもたちの教育

1990s 学校現場における外国に
つながる子どもたちの存
在と教育課題の顕在化

2000s 教育課題の整理
実践と研究の接続
日本語指導の体制の観点
の整理

2010s 行政制度の整備への着手
・特別の教育課程としての整備
・DLAの整備
・教員養成のモデル事業など

視点

日本のインクルーシブ教育をめぐるいくつかの論点

方法の目的化

授業のユニバーサルデザイン (桂 2011など)
「視覚化」「焦点化」「共有化」

「わかる」「できる」ための方法に焦点があてられがち
(吉田 2015)

文脈が切り離されてUDの原則だけが実践される(青山・岩瀬 2019)

アコモデーションとモディフィケーション

「合理的配慮 (reasonable accommodation) 」
のみへのフォーカス

教育内容のあり方への視点が少ない(赤木 2020)

カリキュラム内容、学習目標などの変更
(modification)と合理的配慮は本来一体であるが、
配慮のみが言及されることで、学習内容・目標以外の環境調整と整備に限定される(窪島 2014)

方法の標準化

教育行政や学校の中で「〇〇スタンダード」という形で方法が標準化

一定枠の中が「同質性」と規定され、それでうまくいかない場合、「うまくいかない子ども」と認定され、排除に拍車がかかる可能性(赤木 2017)

考えなくなる教師の増加(赤木 2017)

「個人モデル」と「社会モデル」

障害を「個人のもの」と見なし、医学的知識で障害の診断や解決策を示す

問題を「弱者」の側に「欠損」として押し込め、その人の弱体化、序列化、周辺化を生む(中村 2012)
障害となっているものの所在や原因、責任の帰属先を社会に求める必要性(障害の社会モデル: 星加 2007, 杉野 2007)

問題の所在を「個人」にあて、「方法」に焦点化して所定の目的に到達させる解決

事例

ある外国につながる子どもの多い小学校で担任をする
A先生の話

A先生 小学校勤務17年

10年目～5年間,この学校に勤務。2年目から3年間日本語教室,現在担任。

学校 中規模都市,外国につながる子どもが50%の小学校

小学校の校長室

南浦 聞き手

A先生 上の先生

Bさん 教科教育の研究者

そのほか 校長先生,教頭先生

テーマ

「担任」として外国につながる子どもがいる学級の中でどのよう
に捉えてきているか。

事例

ある外国につながる子どもの多い小学校で担任をする A先生の話

この学校の1年目のころの大変だった記憶のこと

教師のエピソードについては
Web用公開資料としては伏せさせていただきます。
当日の発表ではお伝えします。

確かに苦労はしたけれど、自分のやり方が合わないことはどこの学校でも同じ。
その学校、場所、子どもの課題に気づいてあげなければならない。日本語のことだけじゃなく、さまざまな配慮すべき子どもに目配りをする必要がある。

事例

ある外国につながる子どもの多い小学校で担任をする A先生の話

ある子どものことを語ること

教師のエピソードについては
Web用公開資料としては伏せさせていただきます。
当日の発表ではお伝えします。

事例

ある外国につながる子どもの多い小学校で担任をする A先生の話

授業の中でのこと

南浦 学習指導場面等でも、うまく自分のこれまでがうまく通じないっていうこととか、あるんですか。

教師のエピソードについては
Web用公開資料としては伏せさせていただきます。
当日の発表ではお伝えします。

学校で行っている重点的な部分を説明する。
特に発問を具体的に行うなどの工夫は重要だと考えている。

事例

ある外国につながる子どもの多い小学校で担任をする A先生の話

授業の中でのこと

B 例えは、すいません、何か具体例というか。

何かありますか。何でもいいんですけど。言い方、言葉を選ぶんですか。それとも言葉だけじゃなくて、発問のもっていき方の話とかもあったと思うんですけど。例えは今までだったら「読み取ろう」とか、「これを考えよう」とかで流してたところを、それだけじゃなかなかいかないから、例えは・・・。

教師のエピソードについては
Web用公開資料としては伏せさせていただきます。
当日の発表ではお伝えします。

事例

ある外国につながる子どもの多い小学校で担任をする A先生の話

授業の中でのこと

B もともと小学校って、そういうのすごく重視されますよね。そこがさらに、違うとか。

教師のエピソードについては
Web用公開資料としては伏せさせていただきます。
当日の発表ではお伝えします。

B 特に3、4年、地域のことですしね。

同様に聞いていた教科教育の研究者のBが具体的に、焦点化のあり方や文化的背景への着目のあり方などをたずねるが、そうした事例ではあまり浮かばないと述べる。

事例

ある外国につながる子どもの多い小学校で担任をする A先生の話

教師のエピソードについては
Web用公開資料としては伏せさせていただきます。
当日の発表ではお伝えします。

くふう点などの話は言葉のフォローのくふうに話題が移っていく

考察

小学校の先生の、子どもを見る包摂的な視点

子どもたちの個々を見る目線にある、「課題を見つめる目」
「寄り添う目」の存在

全体的な教育の営為の中で、子どもたち個々の課題に寄り添う視点。
その中で「できなさ」「つまずき」を見つめながらそれを解消していこうとする発想

一人の教師の語りではあるが一定程度

小学校という場の中で教師として「望ましい」とされている姿の一例

場が校長室だったこともあって、こうした語りを見つめる校長先生や教頭先生の目線もそれを促しているかも知れない

論点

教育内容，教育目的への言及への少なさ

方法の目的化

授業のユニバーサルデザイン (桂 2011など)
「視覚化」「焦点化」「共有化」

「わかる」「できる」ための方法に焦点があてられがち
(吉田 2015)

文脈が切り離されてUDの原則だけが実践される(青山・岩瀬 2019)

アコモデーションとモディフィケーション

「合理的配慮 (reasonable accommodation) 」
のみへのフォーカス

教育内容のあり方への視点が少ない(赤木 2020)

カリキュラム内容，学習目標などの変更
(modification)と合理的配慮は本来一体であるが，
配慮のみが言及されることで，学習内容・目標以外の環境調整と整備に限定される(窪島 2014)

方法の標準化

教育行政や学校の中で「〇〇スタンダード」という形で方法が標準化

一定枠の中が「同質性」と規定され，それでうまくいかない場合，「うまくいかない子ども」と認定され，排除に拍車がかかる可能性(赤木 2017)

考えなくなる教師の増加(赤木 2017)

「個人モデル」と「社会モデル」

障害を「個人のもの」と見なし，医学的知識で障害の診断や解決策を示す

問題を「弱者」の側に「欠損」として押し込め，その人の弱体化，序列化，周辺化を生む(中村 2012)
障害となっているものの所在や原因，責任の帰属先を社会に求める必要性(障害の社会モデル: 星加 2007, 杉野 2007)

問題の所在を「個人」にあて，「方法」に焦点化して所定の目的に到達させる解決

実はこの構造は「外国につながる子どもたちへの日本語教育」も同じではないか？

展望

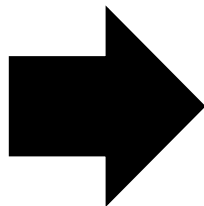
教育内容を絡めたインクルーシブ教育を 生み出すための視点

教師は教育内容や教育目標の変換に無力な存在か？

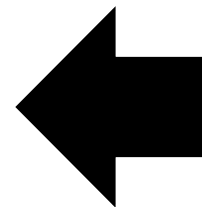
カリキュラム（学習指導要領）の大綱化
カリキュラムマネジメントの重要性
対話性、探求性の推進

若手教員の増加

自治体での
教育スタンダード化



公務員バッシングを
含め学校現場をめぐる
世間の目



教員がそれを推進する際に
萎縮してしまうものの存在

近年の学校と学教教員をめぐるカリキュラムと期待のダブルバインド



NPO法人カタリバと都立一橋高校の協働実践

ちいさなアクションから生まれるシティズンシップ

「新型コロナウイルス発生による個人と社会への影響」を題材に

1 課題の発見

生徒自身が身の回りでコロナ禍によって起きている問題を見つける

どんな言語を
使ってもいい

方法の個別化
学習の個性化

2 仮説を立てる

「気になっていること」の中に、どのような問題があるのか、なぜ問題なのかを、周囲の大人にインタビューして考えを交換する
課題解決に向けての自分の考えを見つける

周囲の大人
母国の友人な
ども

外部NPOとの提
携によって外か
ら刺激する

3 解決への行動を起こす

考えたこと、調べたこと、行動を起こしたことを動画にまとめて世の中に発信する
発表の時間を公開し、大人からの講評をえる

ウェブサイト
へ
掲示

外に開くことで
派生する
エンパワメント

展望

教育内容を絡めたインクルーシブ教育を生み出すための視点

方法の個別化・学習の個性化

「個に応じるアプローチ」の複線性 (加藤, 2004; 宮本, 2005, 石井, 2020)

	指導の個別化	学習の個性化
目的	収斂的アプローチ 個々の差を埋めて1つの目的に向かう, 格差の解消	拡散的アプローチ 学習者の個性, 特質をのばす方向に向かう, 差異の承認
個人差の捉え	学習にかかる時間の差 (量的差異)	関心や学習スタイルの差 (質的差異)
対応の視点	方法への着目	内容 (テーマ) や目的方向性への着目
カリキュラムの捉え方	知能や学業成績を一元的尺度で捉える 量的 直線的	多重知能や個性などの多元的尺度 質的 多面的
発展学習の形態	早修 (acceleration) より早く進む	拡充 (enrichment) より広く深く学ぶ

冒頭のインクルーシブ教育や、外国につながる子どもたちの教育における教科教育や教室の学びは「個別化」の方向に傾く傾向

(母語教育を教科学習に活かす発想なども個別化に収斂される傾向)

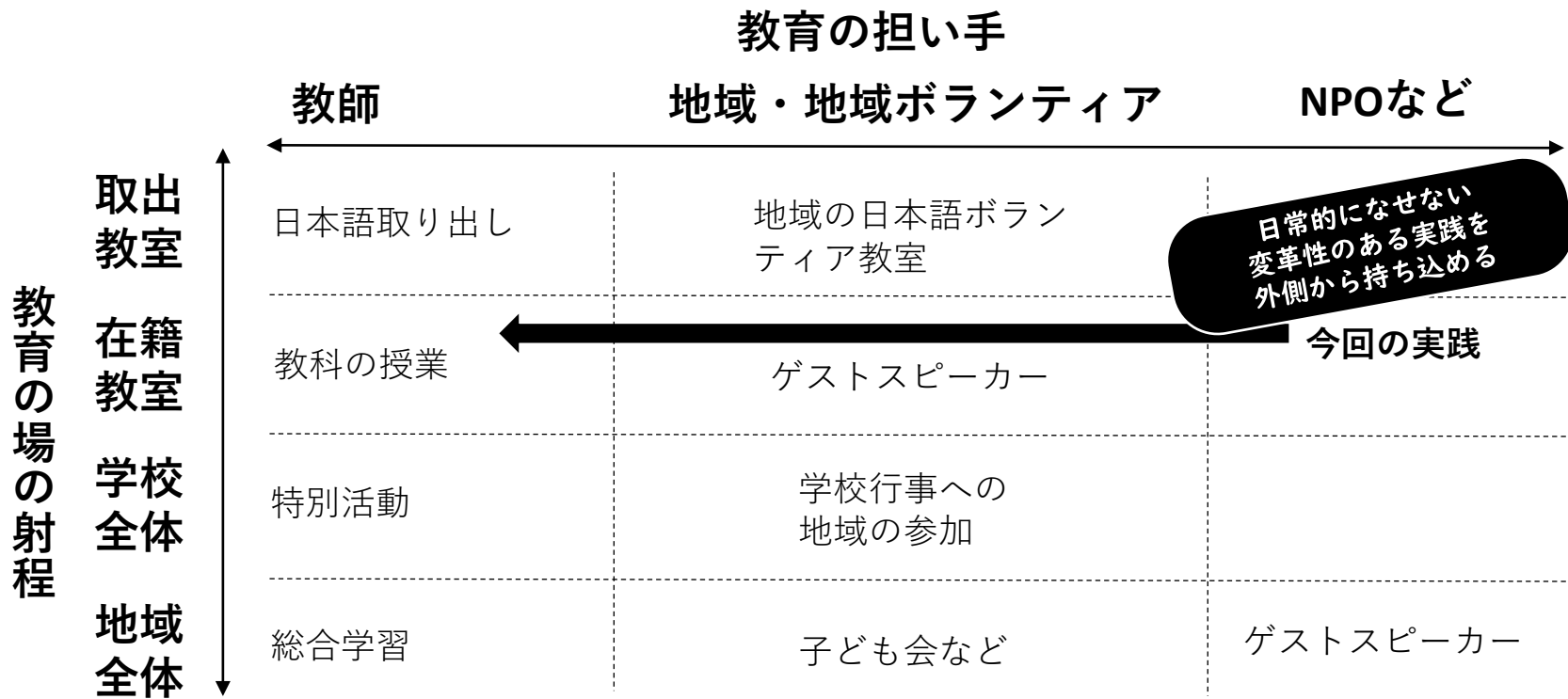
紹介したシティズンシップの授業は「個性化」の視点を取り込んで進む

展望

教育内容を絡めたインクルーシブ教育を生み出すための視点

外部NPOとの提携によって外から刺激する

教育を担う多様な層（古田，2021を参考に）



外部NPOが持っている発想や視点を授業の中で取り込みながら「あえて背伸びをする経験」として実践を行う発想もある

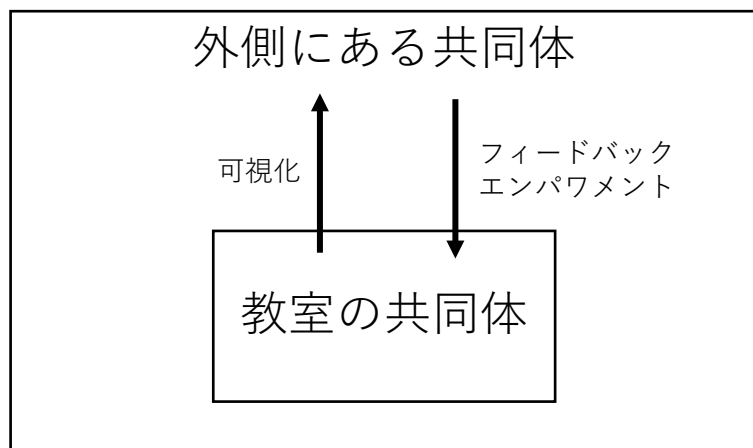
展望

教育内容を絡めたインクルーシブ教育を 生み出すための視点

外に開くことで派生するエンパワメント

実践の可視化と共同体のつながりの生成, 共同体の成長

(南浦・石井・三代・中川 印刷中)



内側で行っている実践を意図的にあえて
可視化する



外側にいる人がその学びの姿を見て
フィードバックとなることばを投げかける



内側の実践をなしていた子どもたちや教師が
エンパワメントされる



外側にいる人たちも、見ているけれど気づ
いていなかった「彼ら」の姿や知らない側
面に気づき、捉え直しが生まれる

目次

論点の提示 インクルーシブ教育における論点と外国につながる子どもたちの教育

- 1 インクルーシブ教育と外国につながる子どもたちの教育の関係性
- 2 インクルーシブ教育にはどのような論点があるか？

方法の目的化

方法の標準化

アコモデーションとモディフィケーション

「個人モデル」と「社会モデル」

問題の所在を「個人」にあて、「方法」に焦点化して所定の目的に到達させる解決

分析と検討 学校教師がもつ外国につながる子どもたちに対する目とその特質

- 3 学校教師は外国につながる子どもたちの存在を教室の中でどう捉えているか？
- 4 3にはインクルーシブ教育の観点からどのような特質があるか？

「個の課題を捉えるまなざし」が子どもたちの課題を捉え、解決への目を生む
ただし、そうしたまなざしがかえって「個別」の問題化と方法への解決に回収される

実践と展望 インクルーシブ教育における「個別化」「方法化」を越えていくために

- 5 実践事例の検討
- 6 実践事例から見られるインクルーシブを生み出す教育の視点

個別最適化ではなく、個性の絡みあうインクルーシブによる知の創造に向かうための発想をどう
つくっていくか。「個別化と個性化」「外部との協働性」「可視化とつながりによるエンパワメ
ント」などは、一つの解決の視点ではあるが――

スライドに出てくる文献

- 青山新吾・岩瀬直樹(2019)『インクルーシブ教育を通常学級で実践するってどういうこと?』学事出版.
- 赤木和重(2017)ユニバーサルデザインの授業づくり再考『教育』853, pp.73-80
- 赤木和重(2020)第5章 インクルーシブ教育, 石井英真(編)『流行に踊る 日本の教育』東洋館出版社.
- 石井英真(2020)『未来の学校—ポスト・コロナの公教育のリデザイン』日本標準.
- 桂聖(2011)『国語授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版社.
- 加藤幸次(2004)『少人数指導・習熟度別指導——人ひとりの子どもをいかに伸ばすか』ヴィヴル
- 窪島務(2014)特別ニーズ教育の今日的課題と「インクルーシブ」教育論の方法論的検討『SNEジャーナル』20(1), pp.75-88
- 杉野昭博(2007)『障害学』東京大学出版.
- 中村麻由子(2012)文化的・政治的実践の媒介としての教師のまなざし—「欠損言説」および「個体能力観」との向かい合いの中で『教育方法学研究』37, pp.13-23.
- 古田雄一(2021)『現代アメリカ貧困地域の市民性教育改革—教室・学校・地域の連関の構造』東信堂.
- 星加良司(2007)『障害とは何か』生活書院
- 南浦涼介・石井英真・三代純平・中川祐治(印刷中)実践の可視化と価値の物語化から見る「評価」概念の問い直し—日本語教育実践における実践共同体構築にもとづいて『教育方法学研究』46.
- 宮本健市郎(2005)『アメリカ進歩主義教授理論の形成過程』東信堂
- 吉田茂孝(2015)「授業のユニバーサルデザイン」の教育方法学的検討『障害者問題研究』43(1), pp.18-25.